

№ 235

DETAIL

2023-JANUARY

WINTER ISSUE

MAGAZINE

FOR

ARCHITECTS

AND

ENGINEERS

# ディテール

季刊 - 冬季号  
2022年12月17日発行・発売 (季刊・冬季号)  
年4回 (3月・6月・9月・12月17日発行・発売)  
平成9年10月31日第3種郵便物認可

*Ten Millenniums Details*  
*Millennium Details*  
*Centennial Details*  
*Decade Details*



# 十 年 百 年 千 年 萬 年

彰国社  
創業90周年  
特別企画

ディテール

ディテール

ディテール

ディテール

理的な機構だけで全部の位置を決められるシステムになっていると思いました。床の部品を嵌めて、ポルティーク（門型架構）を据えつくと高さが決まって、形ができる。プルーヴェのあのシステムというのは、全体像がディテールに組み込まれている。そういう考え方。

同時に、墨出しを排除しているのだと直感的に思いました。東京都現代美術館の展示では実際の組立て映像が流れていたけれど、確かに墨出しをしていない。何人かがそれぞれの部品を組み立てていくと全体ができてしまう（図4）。おそらく墨というの、いろいろな職種とか部品を統合するための特権的なツールで、「千年ディテール」で話したメタフィジックスが実体化したものだと思います。だから墨出しは一般的に、現場の頂点に立って人とモノを束ねる工務店の監督が行う。ということは、墨の排除は、概念的にはゼネコンの排除なんです。サブコンだけでパタパタと組み立てればできてしまう。

在来木造はまさにそうなっているじゃないですか。建築家がいないんです。大工と左官と畳屋と経師屋がそれぞれ勝手に仕事をすることでできてしまう。要するに、建築家のような全体のコンダクターたる超越的かつ属人的な存在を、システムに代替させるという発想なんです。在来木造の場合は、標準化されたメタフィジカルなルールを幕府が封建的に決められたので成立した側面があるのですが、プルーヴェはそれを物のジョイントみたいなところに埋め込んで、ルールをディテールとして実装してしまった。あれはすごく新しい発想なのだと思います。

立花——確かに、映像では墨出しどころか寸法すらあまり正確には測っていないようでした。プルーヴェは建築家であり生産者、自分では構築家といっているけれども、職と特権の対応関係を除いたからこそできたような気がします。門脇——おそらく基礎のカネテ（直角）だけしっかり出しておけば勝手に建ってしまう感じですね。組立てがあらかじめその部品の中に含意されているというのも百年ディテールの一つの特徴ではないでしょうか。それは建築家を排除するシステムだといえると思う。

渡邊——まさに工業化の精神で、建築家はいるらない。



たとえば高力ボルトみたいなものは、僕は百年ディテールかなと思って聞いていました。あれはシステムで、全体を構築していくものだけれど、それで描かれている全体像はどうにでもなりますね。

門脇——その二つがありそうですね。全体像をかなりリジッドに組み上げてしまうものと、いかようにでもなるもの。だからたとえば、在来木造は百年ディテールのだけれども、あれは

図4：F8×8 BCC組立式住宅（設計：ジャン・プルーヴェ、ビエール・ジャンヌレ）。写真は東京都現代美術館の展覧会「ジャン・プルーヴェ 椅子から建築まで」（2022年7月16日～10月16日）で組立て展示されたもの（撮影：高野ユリカ）©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 C4076

いかようにでもなる系。ハウスメーカーのようなクローズドなシステムは、こうにしかならない系。そういう違いはありそうですね。

### 着脱可能な ジョイントとディテール

門脇——そういう視点で、百年ディテールの事例を考えてみましょうか。

伏見——メタボリズムは全体がどんどん増殖していくという意味では、本当は全体の形よりもジョイントが一番重要な運動だったんじゃないかと思います。後の人からしたら、20年後、30年後でも工業生産で簡単につくれるものであってほしいですから。

「中銀カプセルタワー」は意外に簡素なジョイントですね。躯体からシャフトみたいなものが出ていて、そこのほぞ穴にカプセル側のほ